イラクサ科カラムシ属 (室蒸)

Boehmeria nivea (L.) Gaudich. var. concolor Makino f. nipononivea (Koidz.) Kitam. ex H.Ohba

自生環境

林縁、堤防、野原 など

原産地

日本在来

生育を脅かす要因

今のところ特になし

身近な場所にごく普通で、今のところ絶滅の心配はありません。しかし目の敵にしすぎるのは考えもの。地域に咲く野の花として、やさしく見守る気持ちを大切にしたいところです。

特徴

- ☆ 林縁や野原など、いたるところにごく普通に生える多年草です。 草丈は1~2mに達し、茎や葉は毛が多く、さわるとザラザラ しています。葉は表面は緑色ですが、裏面は綿毛が密に生え、 白く見えます。ときに綿毛がなく、表裏ともに緑色のものがあり、 これをアオカラムシと呼びます。
- ☆ 花期は7~9月。茎の上部に雄花が、下部に雌花がつきます。 秋から冬にかけて、球形の果実の集まりがびっしりとつき、茎からのれんのように垂れ下がります。
- ☆ フクラスズメという蛾の幼虫の食草になっています。また、アカタテハやラミーカミキリなど、イラクサ科植物を食べる昆虫の姿も見かけます。

市内の分布状況

市内全域、環境を問わず どこにでもごく普通に見ら れます。広範囲にわたって の群生となることもしばし ばです。



カラムシの名前は、カラ(茎)を蒸して繊維をとることが由来となっています。カラムシから繊維を取り出し、布にするまでは手間がかかる上に、高度な技術が必要ですが、織った布はとても上質です。越後上布、小千谷縮布、八重山上布などが有名です。ちなみに、本州で唯一、原料としてのカラムシを生産している福島県昭和村では、観光資源として地域おこしに活用されています。













